Shinshu University Journal of Educational Research and Practice, *No.12*, pp.91-106, 2018
信州大学教育学部研究論集　第12号　pp.91-106　2018年

＜研究報告＞

日米交流黎明期に関する調査報告

小野文子 信州大学学術研究院教育学系

キーワード：日米交流，英語学習，留学生，チャールズ・ランマン

１．はじめに

日本が安政の五か国条約を結んだ1858年，福沢諭吉（1835‐1901）は江戸築地鉄砲州に家塾を開き，蘭学を教えた。しかし，翌1859年に開港したての横浜に行ったところ，店の看板やビンの貼紙さえも何が書かれているのか分からず，「今まで数年の間死物狂ひになって和蘭の書を読むことを勉強した，其勉強したものが今は何にもならない」と落胆した。そして，「今世界に英語の普通に行われて居ると云ふことは予て知て居る…中略…今我国は条約を結んで開けかゝって居る　左すれば此後は英語が必要になるに違ひない」と考え，英語を学ぶことを決意して，横浜から帰った翌日から江戸で英語が学べるところを探したが，「江戸中に何処で英語を教へて居ると云ふ所のあらう訳もない」と記している。[1]福沢が書き記したように，1850年代末に江戸で英語を学ぶことは難しい状況であった。[2]

それから35年後の1894年，内村鑑三（1861‐1930）が *Japan and Japanese*（Tokyo: Minyusha, 1894）を出版，続いて *How I Became a Christian: Out of My Diary*（Tokyo: The Keiseisha, 1895）を，1900年には新渡戸稲造（1862‐1933）が *Bushido: The Soul of Japan* を米国フィラデルフィアのリーズ・アンド・ビドル社より刊行した。*Bushido* は，海外で多くの読者を得たことから1908年に桜井彦一郎（鴎村）によって日本語訳され，『武士道』として丁未出版社から出版された。そして20世紀に入ると，内村や新渡戸のように英語圏での海外留学や長期の海外生活を経験していない岡倉天心(1863‐1913)が，*The Ideals of the East with Special Reference to the Art of Japan*（London: John and Murray, 1903. 日本語訳タイトル：『東洋の理想』），*The Awakening of Japan*（NY: The Century, 1905. 日本語訳タイトル：『日本の覚醒』），*The Book of Tea*（NY：Fox Duffield & Company, 1906. 日本語訳タイトル：『茶の本』）を出版し，いずれも日本語に翻訳された。*The Awakening of Japan* は，1905年1月1日付の『ロサンゼルス・ヘラルド』紙の日曜版の新刊書紹介欄において，「この著者の前著『東洋の理想』と同様に，翻訳ではなく，日本人の著者が英語で書下ろした本」と紹介された（資料1）。[3]そしてこの頃，岡倉天心と共に渡米した横山大観，菱田春草は，ニューヨークのセンチュリー・アソシエーション（1904年4月），ナショナル・アーツ・クラブ（1905年1月），ボストンのオリ・ブル夫人邸（1904年11月），ワシントンD.C.のフィッシャー画廊（1905年3月）にて展覧会を開催した。[4]大気をも表現しようという彼らの新しい描法は，日本では，朦朧体と揶揄されたが，アメリカでは好評を博した。

日本が開国した頃，英語を流暢に話すことができる日本人はほぼ皆無だっただろうし，アメリカで日本の伝統文化を知る人はほとんどいなかったと言ってよいだろう。実質的な日米交流は，ペリー提督の来航，つまり 1853 年以降に始まったが，そのわずか 50 年後には，日本人が英語で執筆した書籍が出版され，海外で多くの読者を得たことで，日本語に翻訳されたという事実は注目に値するだろう。20 世紀初頭における日本人の文化・芸術活動がアメリカで受け入れられ，評価されたのは，開国から 50 年の間に様々なレベルにおいて，日本とアメリカの間に交流があったことが背景にあると推測される。

本稿では，科学研究費助成による研究課題「日米文化・芸術交流に果たした日本人留学生の役割に関する調査研究」（課題番号　17K02312）の初年度前半期の調査結果を，幕末から明治初期にかけての英語学習，初代駐米公使森有礼（1847 - 1889）の活動，そして森有礼や日本人留学生を支えたチャールズ・ランマン（1819 - 1895）を中心に，研究報告としてまとめる。

２．英語学習の背景

1858 年に締結された安政五ヶ国条約によって，日本は事実上海外の国々と通商を行うことになった。このことにより，貿易に関わる実際的な業務を行うことができる人材が必要となった。また，海外の貿易会社が開港地に支店を開き，多くの外国人が日本に居住するようになると，攘夷派による外国人排斥の動きにより，殺傷事件などが起こったことから，幕府はこうした状況への対応を迫られた。さらに，安政五ヶ国条約は，治外法権を認めたこと，関税自主権を日本が持たないことなど，日本にとって不利な不平等条約であったことから，条約を改正するために，外国語を話すことができる役人を育てることが，幕府にとって重要な課題となった。日本側のこうした事情と同様に，諸外国にとっても，オランダ語，あるいは中国語を通しての日本とのやり取りは時間を要し，正確さに欠けることから，自分たちの言葉を理解することができる日本人を必要とした。アーネスト・サトウによると，1862 年には，「通話の際には，口頭，文書のいずれによるも，常にオランダ語を媒介としていた。これは，英語を知っている日本人がまだほとんどなく，日本語を話せる外国人も片手で数えるほどしかなかったからだ。」という。[5]実際に，日英修好通商条約の第 21 条には，条約締結 5 年後にはオランダ語の訳文を添えず，それぞれの言語で示すことが示されており，幕府にとって英語の習得は急務であった。

こうした状況を背景として，アメリカ公使タウンゼント・ハリス（1804 - 1878）や英国公使ラザフォード・オールコック（1809 - 1897）が，日本人の英語習得について日本側に申し立てたという。[6]ハリスは，1860 年 7 月 8 日に老中安藤対馬守（信正）（1819 - 1871）宅で会談を行い，15 歳から 18 歳位までの少年を神奈川に送ること，伝習所を神奈川に準備すること，そして神奈川在住の「米医両人」が青年たちの英語教育を行うことを伝えた。この「米医両人」とは，宣教師・医師のジェームズ・ヘボン（1815 - 1911）と宣教師サミュエル・ブラウン（1810 - 1880）であった。[7]アメリカやイギリスからの要請，そして幕府にとっても

英語を話すことができる人材が必要であったことから，英語教育を行う「英学所」が横浜に設立された。ヘボンやブラウン，そして彼らと同様，キリスト教の伝道を目的として日本にやってきた宣教師ジェームズ・バラ（1832 - 1920）が中心となって英語教育に取り組んだ。[8] 日本でキリスト教が解禁されるのは 1873 年のことであるが，居留地内に在住する外国人には信教の自由が認められており，宣教師たちは英語を教えることで日本人との接点を持ち，近い将来，宣教活動を行うことができるように備えたのである。[9]

英学所では，英語だけでなく，地理や数学も教えられており，英語以外の知識も習得して，身に着けた知識を英語で話せるようになる，という実用，実践的な教育が行われていた。また，1863 年 8 月 25 日付のブラウンの書簡には，次のように書かれている。

> …長老ミッションとわたしたちミッションの同労者たちとが，政府の学校で，通訳者養成の一クラスを教えはじめました。私のクラスは 15 名に増加しました。バラ氏が英語を教えていたふたりの青年とひとりの医師とが，開校早々参加しています。…中略…『日英会話篇』という，私の著作が授業に役立ちます[10]

この記述から，英学校は通訳することができる人材の養成を目的としていたことが分かる。英学校が設立された 1862 年に横浜元町に生まれた岡倉天心は，ジェームズ・バラの私塾に通い始めたのが 7，8 歳の頃と言われているが，その後 1871 年に開校された英学塾高島学校に通い，1873 年に東京外国語学校に入学，1875 年には東京開成学校高等普通科に入学した。東京開成学校は，東京医学校と合併して 1877 年に東京大学と改称され，岡倉は東京大学文学部を第一期生として 1880 年に卒業した。この年の 9 月，京都・奈良の古社寺を訪ねたフェノロサに通訳として随行，10 月 18 日から文部省に就職し，音楽取調掛（1879 年 10 月に設置。掛長は伊沢修二）に勤務した。[11]この時の主な職務内容が，同掛のお雇い外国人メーソンの通訳，その他の事務であった。[12]つまり，岡倉天心が幼少期に横浜で実践的な英語教育を受け，その後東京外国語学校，東京開成学校，東京大学に学び，メーソンやフェノロサの通訳を務めたことを考えると，彼は，幕末から明治初期にかけて日本が目指した「英語を話すことができる役人」としての官僚教育の最も早期の成功例であったと言えよう。

岡倉が生まれて幼少期を過ごした横浜では，英語が様々なレベルにおいて広まっていたようである。オールコックによると，漆器・籠細工・磁器・青銅器・絹織物，刺繍品など，外国人向けの商品がならぶ店の店主は，値段を聞けば，かなり分かりやすく値段をいうことができたという。[13]幕末から明治初期にかけての横浜では，庶民の生活においても，何らかの形で英語に触れ，学ぶことが必要とされていたことが分かる。また，中浜万次郎『英米対話捷径』（1859 年），小島雄斎『商用通語』（1860 年），福沢諭吉『増訂華英通語』（1860 年），ヴァン・リード『和英商話』（1862 年）など，アルファベットや数の数え方，日常会話のフレーズなどが訳文と共にカタカナで表記された日常会話集が発行されていたことから，こうした書物を手立てとして，庶民が外国人とのコミュニケーションのための会話を学んだことが考えられる。[14]

高等教育においては，1860 年頃には蕃書調所でも英語を教え初め，1871 年 1 月に大学南校を訪問したウィリアム・グリフィス（1843 - 1928）が，「それは『大学』と呼ばれていたが，実際は語学学校というほうが当たっている」と述べている。[15]また， 1876 年に東京開成学校に入学した三宅雪嶺（1860 - 1945）によると，その翌年東京開成学校が東京大学と改称され，予科を予備門と称し，様々な改革が行われて，「外山正一が英語，山川健次郎が物理学，矢田部良吉が生物学，菊池大麓 が数学を受け持ち，邦人が多くなったけれど，いずれも教場で英語を使用し，英語で問いもし，答えもした。」という。[16]また，菊池，外山，矢田部の授業を次のように回想している。

> 菊池氏は幼年より学才を以て知られ，留学中にも評判者になり，始めて若い姿を教場に現わすや，英語の自由なること外国人に異ならなんだ。外山氏でも矢田部氏でも教場で英語を使用するものの日本式英語とすべく，中にも外山氏は発音が変則流であった。それで平気で外国人と語るのみならず，自ら英語に長ずるとし，「長らく洋行したり，達者に喋ったりしても，それで英語に巧みと言へるものではない」と言った。というのは，自ら語る所は聞いて流暢でなくても幾らか高尚でクラシカルとした所があろう。矢田部氏も文学趣味があり，外山が英語を受け持つと笑った程であって，英語で引けを取らぬ位に考えて居った。[17]

1878 年の『東京大学法理文学部一覧略』は日本語と英語のバイリンガルとなっており，「学科課程」には，各部の授業は，最終的には日本語で行うことを目的としているが，暫くは英語で行う，とされている。[18]この『東京大学法理文学部一覧略』で興味深いのは，学科課程では「英語」と示されているが，授業欄では「英吉利語」と表記されていることである。そして，各教員の担当科目欄を見ると，英語を教えていたのは，ウィリアム・E・グリズビー（イングランド出身）と外山正一，英文学はウィリアム・A・ホートン（アメリカ合衆国出身）となっている。外山はアメリカに留学していたことから，三人の中で「英吉利」に該当するのはグリズビーのみであるように思われる。1878 年は岡倉天心が在学していた年であり，岡倉の名前は，「文学部第一科第二年生」の在学生として記されている。果たして岡倉はどのような英語を学んでいたのか，今後さらに調査を続けたい。

以上に概観したように，幕末から明治初期にかけて庶民のレベルにおいても英語が広まり，高等教育においては，幕府，そして明治新政府が，英語を実用的に使用することができる人材を育てることを目指していたことが分かる。開国後の日本にとって，まずは英語を習得することが国際社会の一員として必要であるという認識のもとに，西洋を模範とした学問の潮流が、蘭学から英学に変化したことが分かる。

３．森有礼と留学生たち

明治維新後，明治政府が西洋文明摂取のために用いた手段の一つが，外国への留学生の派遣であった。1866 年に寛永の鎖国条例が解除され，日本人の海外渡航が可能になったことから，1860，70 年代，欧米に渡った日本人留学生数は 700 人近くにもなるとも言われ，官

費および私費の留学生の数は，「明治 3 年の末から 4 年の前半の間に…集中的に増えた」という。[19]しかし，それ以前に，密航という形をとって，吉田松陰や新島襄のように海外渡航を試みたものもいれば，藩主が率先して海外に留学生を送り出した例もある。長州藩は，伊藤博文（1841 - 1909），井上馨（1836 - 1915），井上勝（1843 - 1910），遠藤謹介（1836 - 1893），山尾庸三（1837 - 1917）の 5 名を，薩摩藩は 3 名の視察係と 15 名の留学生からなる使節団をイギリスに派遣した。彼らは，密航者として変名を用いて渡航したが，帰国時にはすでに鎖国が解除されており，日本全体が欧化主義に向かう時世の中で，リーダーとしての地位を築いていった。

本稿で注目するのは，1865 年沢井鉄馬の変名を用いて薩摩藩の留学生としてイギリスに密航し，その後アメリカに渡った森有礼である。森有礼は，1847 年に鹿児島に生まれ，薩摩藩の藩校造士館に学び，その後 1864 年に薩摩藩が創設した洋学校開成所で英学を学んだ。1865 年から 3 年間海外生活を送り，1868 年 6 月に帰国した時には，すでに文明開化を迎えていた。森は，欧米文化の移植の必要性を説き，帰国早々明治政府に登用されて，徴士外国官権判事，議事体裁取調，学校取調兼勤などを務めた。廃刀論を建議したことから，1869 年に一旦は官職を免ぜられたが，1870 年 12 月，23 歳で最初の米国在勤小弁務官（駐米公使）となった[20]。その後，1879 年には特命全権公使としてイギリス駐在，その後 1885 年に内閣制度が成立すると，第一次伊藤内閣の文部大臣に就任した。こうした官僚としての活動以外に，学術結社明六社を起こして『明六雑誌』を刊行したり，商法講習所（一橋大学）を設立したりと，1890 年に 43 歳の生涯を閉じるまで，精力的に活動した。

本稿で注目するのは，1870 年 12 月から 1873 年 3 月の間の，初代駐米代理公使としての活動である。この時森は小記外山正一，権正記名和道一（1838 - 1873），大令吏矢田部良吉（1851 - 1899）を伴って渡米したが，森有礼 23 歳，外山正一 22 歳，名和道一 32 歳，そして矢田部良吉は 19 歳であった。つまり，32 歳であった名和以外，現代に当てはめると，大学を卒業したばかり，あるいは在学中の年齢の若者たちが派遣されたのである。森の主な任務は，岩倉使節団のアメリカ滞在の受け入れと，留学生を支援することであった。森は 1866 年 6 月 3 日付の手紙で，「米国は今開国を去ること漸く二百年国家の政大小となく悉く万民と謀り公平正大の政事をなす」，「私窃かに勘考を結ひ有無を通する所此国なりと着眼仕候」と記している。[21] つまり，アメリカは新しい国であるが，全国民と共に公正な政治を行っており，日本はアメリカと親交を結ぶべきである，と伝えている。森が最初に渡米した 1860 年代後半のアメリカは，南北戦争が終結した混乱の時代にあり，南部の再建，アメリカ大陸を横断する鉄道の建設など，国家として統一に向かう時期であった。アメリカの国家として成立は，1776 年の独立宣言とともに成し遂げられるが，それは，国家としての「独立」であり「統一」ではなかった。実際，広大な北米大陸西部への領土拡大は 1890 年のフロンティア消滅宣言まで続いた。

森はチャールズ・ランマンを雇い，アメリカのこうした状況について *Life and Resources in America*（『アメリカにおける生活と資源』，以下翻訳タイトルを用いる）としてまとめ

た。[22]『アメリカにおける生活と資源』は，13 章で構成されており，政治，農業，商業，工業，宗教，工場，教育，文化，鉱夫，軍隊，都市，西部開拓，司法など，様々なテーマについて，統計的な数字を挙げながら，人々の生活などを含めて説明している。[23]森有礼が監修し,ランマンが執筆したとされる本書の 1871 年の初版には,‘Prepared under the Direction of Arinori Mori. For circulation in Japan’と記されている。つまり，1860 年代にアメリカでの生活経験があった森は，使節団が前もってアメリカについての知識を得ることができるように，当時のアメリカの状況について，13 の項目からまとめたと考えられる。ランマンによると，森は個人的にも，日本人の利益のために教育や出版に並々ならぬ関心を示していたという。[24]従って、『アメリカにおける生活と資源』は、岩倉使節団が，統一に向かうアメリカのどういった点を参考とし，日本の行政に取り込んでいくのか，という視点からまとめられたと考えられる。また，この本の出版の目的は，「偏見を取り除くこと」と森が「序」の中で示している。つまり，おそらくこうした書物を出版することで，アメリカについての情報を日本に発信し，日本におけるアメリカ理解を促そうと森が考えていたことが推測される。

1872 年に出版された *Japanese in America*（『アメリカ在留日本人』，以下翻訳タイトルを用いる）は 3 部構成となっており [25]，第 1 部は「日本大使館」とされ，岩倉使節団の訪米についての詳細な記録，2 部は日本人留学生が書いたエッセイ [26]，そして 3 部は『アメリカにおける生活と資源』の再版となっている。第 1 部では，明治天皇のアメリカ大統領へのメッセージ，サンフランシスコで行った伊藤博文の演説，そして 5 人の女子留学生について多くのページが割かれている。特に津田梅子（1864 - 1929）については，彼女の父親が英語学者であること，父親から英語の辞書を渡され，渡米前にすでに少し英語を学んでいたこと，そして彼女が家族の写真を数枚持参していることなどが記されている。[27]ランマンと妻のアデリンは，この後 11 年に渡たり津田梅子を育てることになるのである。

2 部の冒頭では，ランマンがアメリカに留学している日本人留学生について 12 ページほどを割いて概観し，1870 年代の初めには，ニューヨーク州，ニュージャージー州，ペンシルベニア州，メリーランド州を中心に 200 人が学んでいるとされている。留学生たちは，日本において高い教育を受けており，英語の習得も早く，アングロサクソン系の学生たちに見劣りすることはなく，ある学生の明快で，正確，そして鋭い文体は，アメリカのプロの著述家の役にも立つであろう，と評価している。ランマンによると，留学生の多くは自分たちの学習の成果を森有礼に報告する傾向にあり，その中の優れたエッセイをこの本に掲載した，と説明している。13 本のエッセイと執筆者は以下の通りである。

- 井上良一（1852 - 1879）：The Practical Americans, The Strength and the Weakness of Republicans, The Memorable Year, Public and Private Schools
- 神田乃武（1857 - 1923）：Japanese Costume, George Washington, Christmas
- 外山正一（1849 - 1900）： The Chinese Ambassador in France, Expedition to a Romish Church, Raid on the Missionaries

・江木高遠（1849－1880）：Co-education of Boys and Girls
・種子島敬輔（1844－）：Oriental Civilization （モンソン・アカデミーの卒業式で発表）
・目加田種太郎（1853－1926）：History of Japan （マサチューセッツ州ウエスト・ニュートンのライシーアムで発表）
・林薫（1850－1913）：Christianity in Japan
・高木三郎（1841－1909）：Japanese Poetry
・新納刑部（1832－1898）：A father’s Letter

こうしたエッセイは，日本の歴史，伝統，文化をアメリカ人に紹介するというよりも，自分たちの視点からアメリカ社会について観察し，鋭く分析したものである。アメリカを無条件に称賛するものではない彼らの分析や批判からは，留学生たちがアメリカ社会についての知識を有し，冷静に観察していたことが分かる。そして注目したいのは，ここにエッセイが掲載されている留学生たちの年齢である。森有礼は，1847 年の生まれである。つまり，彼らの多くは森と同じ年代であり，種子島敬輔，高木三郎，新納刑部は，森よりも年上である。ということは，彼らは，異国の地における自分の学習の進捗状況を純粋無垢に森に報告していたというよりはむしろ，それぞれの見聞により考えたことをまとめたと考えられる。経緯について知ることができる史料を発見するには至っていないが，わざわざ英語で森にエッセイを送ったことを考えると，恐らく出版を目的としてこうしたエッセイを書くことについて，森との間で話がなされていたことが推測される。さらに，テーマの選定，つまり，日本の歴史や服飾などの文化的なテーマから，アメリカ人の性質，そして時事的な問題を取り扱っていることを考えると，刊行の目的のひとつとして，アメリカにおける留学の成果を本国に伝えることであった可能性も想像される。留学生たちの英語力については，文章にそれぞれの個性が表れているとはいえるものの，プロの著述家ランマンによる修正が入っていることが大いに考えられることから，この出版物においてのみ判断することは難しい。しかしながら、ランマンが日本人留学生たちの英語力を高く評価していたことは、すでに述べた通りである。

アメリカにおける日本人留学生の英語表現，発信については，塩崎智の研究に詳しいが[28]，こうした活動は男子留学生に限らず，女子留学生たちも同様であった。日本人女性として初めてアメリカの大学において学士号を取得した山川捨松（1860－1919）は，1882 年 6 月のヴァッサー大学の卒業式で‘British Policy toward Japan（イギリスの対日本政策）’というタイトルで演説した（資料 2）。[29]森有礼が最初の留学を終えて帰国した 1868 年，日本は戊辰戦争の真っただ中にあった。新政府に対抗して会津藩を中心とした奥羽越列藩同盟が結成されると，薩摩藩と長州藩を中心とした新政府軍は討伐のために会津へと向かった。この時山川捨松は 8 歳，会津若松城内に籠城しており，東征軍の砲撃で義理姉を失っている。会津藩の降伏，若松城開城，その後様々な困難を経て，捨松は 1871 年に岩倉使節団とともに

に，日本人女性初の留学生として津田梅子らと共に渡米した。この時にアメリカ公使として彼女たちの世話をしたのが薩摩藩出身の森有礼である。その後 11 年に亘ってアメリカで学んだ捨松は，艶やかな着物を身にまとい，イギリスの保守的な貿易政策を痛烈に批判し，「日本国民は，最後の一滴まで血を流しても抵抗し，国の独立のために戦うことをやめないであろう」と述べ，アメリカの新聞各紙において高い評価を得た。岩倉使節団と共に渡米した吉益亮子（1857 - 1886），上田貞子，山川捨松，永井繁子（1862 - 1928），津田梅子の留学は，黒田清隆（1840 - 1900）の開拓使建議書により実現したものであることは広く知られている。この建議書は、黒田が開拓事業団の視察のために 1871 年に渡米した際に，アメリカにおける教育を受けた女性の地位に感銘をうけたことがきっかけとなっていることから，捨松が 11 年に及ぶ留学生活を卒業式での演説で終えることができたことは，当時の日本にとって，大きな成果であったと言えるだろう。

４．チャールズ・ランマン

さて，こうした出版活動を森有礼が単独で行ったわけではなかった。森は，スミソニアン協会理事のジョゼフ・ヘンリーの推薦により，1871 年 9 月から 1872 年 8 月の間，チャールズ・ランマンを秘書として雇い，森監修のもとにこうした出版物が刊行したのである [30]。ヘンリーは，1846 年にスミソニアン協会最初の書記官に選出され，1878 年まで 30 年以上に及んで同職を務めた，スミソニアン協会の運営を軌道に乗せた人物である。また， 1860 年に渡米した万延元年遣米使節団の一行を「百物館」に案内した，と言われている。[31]つまり，日米交流の初期の段階から日本と接点を持っていた人物である。

チャールズ・ランマンは，1819 年にミシガン州に生まれ，豊かな自然に囲まれて育った。父のチャールズ・ジェームズ・ランマンは弁護士，祖父のジェームズ・ランマンはアメリカ上院議員であった。ランマンは，ハドソン・リヴァー派の画家アッシャー・ブラウン・デュランド（1796 - 1886）に学んだと考えられ，1835 年から 1845 年の 10 年間，ニューヨークでトーマス・コール（1801 - 1848）などのハドソン・リヴァー派の画家たちと親交を持ち，多くの風景画を描いた。1846 年にはナショナル・アカデミー・オブ・デザインの会員になっている。1845 年に『モンロー・ガゼット』の編集者，1846 年に『シンシナティ・クロニクル』の共同編集者，1847 年には『ニューヨーク・エクスプレス』の編集委員など，新聞編集の仕事に従事した。1848 年にワシントン D.C. に居を構え，1871 年に日本公使館の秘書になるまでに，陸軍省，内務省，米国議会下院の司書，上院議員ダニエル・ウェブスターの私設秘書を経験している。1859 年にはアメリカ合衆国議会人名事典を出版した。アマチュアの探検家でもあったランマンは，ロッキー山脈やミシシッピー川流域を旅し，こうした経験を彼の手になるスケッチと共に著書にまとめて出版した。また，1857 年には，銀行家のウィリアム・ウィルソン・コーコラン（1798 - 1888）によって設立されたアメリカ絵画作品のコレクションをカタログ化しており，ランマンの作品もこの時期にコーコランのコレクションに加わっている。[32]コーコラン・ギャラリー・オブ・アートは，1869 年にアメリカで最

も早い美術館としてオープンした。同ギャラリーは，財政難により 2014 年には閉館し，収蔵作品はワシントン D.C.にあるナショナル・ギャラリー・オブ・アートに，附属の美術学校を含めた建物は，ジョージタウン大学に移管された。

編集者，司書，秘書，そしてアマチュアの探検家としてアメリカ東部やミシシッピー川流域を旅し，その経験を自ら描いたスケッチを用いて自著として出版したランマンは，アメリカについての多くの知識を有し，日本に報告するために書物としてまとめたいと考えた森にとっては，申し分ない経験と経歴であったに違いない（資料 3)。筆者が現在確認できているだけでも，森に紹介される以前にすでに 15 冊の書籍を出版しており，かなりの経験を積んでいたことが想像される。すでに述べたように，ランマンは秘書として着任早々，1871 年に『アメリカにおける生活と資源』を，そして 1872 年には『アメリカ在留日本人』を出版し，確かな成果を上げている。こうした出版に関連するランマンの手紙や原稿，その他の資料は，チャールズ・ランマン・ペーパーとして，アメリカの様々な大学図書館や研究機関のアーカイブに保存されており，その全体を把握するには今後更なる調査が必要である。

ランマンについては，日本ではほとんど研究が行われていない。彼は妻のアデリンと共に津田梅子の育ての親として知られており，『津田梅子の社会史』（高橋裕子著，玉川大学出版部，2002 年）など，津田梅子研究の文脈の中で語られてきたにすぎない。また，吉益亮子，上田貞子，山川捨松，永井繁子たちも渡米してしばらくは森有礼が後見人となり，ランマン宅に梅子と共に寄宿していたこと，さらに，1871 年に徳川家の給費生として政治や法律を学ぶために渡米した川村清雄が，画家に転向することを決め，1872 年 10 月から翌年の春までおよそ半年間チャールズ・ランマン宅に滞在したことが知られている。ランマンの妻アデリンが梅子の母に宛てた手紙には，外山正一と親友で，ミシガンで学んでいた青年が，ランマンに絵を学びたいということで，ランマン家にやって来た，ということが記されている。[33] すでに述べたように，ハドソン・リヴァー派の画家として制作活動を行っていたランマンが，留学先をパリに転じることなど，川村に何らかの助言をしたことが想像される。当時アメリカ人の多くの画家がバルビゾンを中心としたフランスで絵画を学んでおり，やはり絵画を本格的に学ぶためにフランスに行くべきであるという結論は，自然の流れであったと考えられるのである。

ランマンの作品や画家としての活動は，アメリカでもほとんど研究されておらず，作品の所在についても，公的美術館に所蔵されていることが分かっている作品の数は僅かである。現時点において，1985 年にニュージャージー州のモリス美術・科学博物館において展覧会が開催されたことのみ確認できている。ミネソタ・ヒストリック・ソサエティに保存されている，ランマンが 1892 年 11 月 9 日にジェームズ・ヒルに宛てた書簡とその手紙に同封されていたランマン作品についてのパンフレットから，1883 年にはランマンは自分の作品を 350 点ほど手元に置いていたこと，その後も相当数の作品が彼の手元にあり，作品を売りたいと考えていたことが分かる。[34]また，ランマンの没後，1915 年に夫人のアデリンがランマン邸をオークションによって売却した際には，ランマンの作品 400 点が含まれていた。その

うちの 70 点ほどが，モリス美術・博物館でランマンの展覧会が開催された 1985 年の時点において，ランマンの子孫が所蔵していることが分かっている。[35]吉川利一によると，ランマン邸には美術品や骨董品が並べられ，壁にはランマン自身が描いた風景画などがかけられており，森や宮内省から贈られた日本の品々も飾ってあったという。[36]前述の通り，ランマンの妻から津田梅子の母に宛てた手紙から，川村がランマンから絵を描くことを学んでいたことは明らかであり，また，ランマンの作品が彼自身の手元にあったことを考えると，川村がランマンから何らかの影響を受けたことは否定できず，今後はこうした点についても研究を進め，日本の近代絵画における「西欧」だけでなく，「西洋」美術の摂取についても考察したいと考えている。ランマン没後のランマン邸売却のオークション後に彼のコレクション等は散逸してしまったが，幸い本調査の過程でオークションに関わる資料の所在を確認することができた。今後は，アメリカのアーカイブに保存されている一次資料を調査し，研究を進める。

おわりに

以上の通り，ペリー来航によって江戸幕府が開国を決断して以降，日本は国際社会の一員として他国と関わるために，幕末から明治初期にかけて，英語習得に邁進した。開港地においては，片言の英語が話せることは生活の手段として必要であっただろうし，幕府や明治新政府にとっては，国際社会の中で生き延びるために，英語を読み，書き，話すことができる人材を育てることが急務であった。英語学校の設立，高等教育機関での英語による授業，そして海外への留学派遣は，目指すべき日本の姿を実現するための手段であった。福岡藩主黒田長知（1839 - 1902）に随伴して岩倉使節団と共に渡米，ハーバード大学に学んだ金子堅太郎（1853 - 1942）によると，1873 年金子がボストンのグラマー・スクールの第 2 学年にあったとき，公使の任務を終えて帰国する直前の森有礼がボストンを訪問し，「日本の将来は君等学生の双肩に掛かれり」と述べたという。[37]森は，藩主がかかわっていたとはいえ，密航という手段により海外に留学，その後外交官という地位を得て，強力なリーダーシップのもとに，積極的に日本人留学生がその存在感を発揮できるように尽力した。その手立ての一つが書籍の出版であったことが想像されるが，それを支えたのがチャールズ・ランマンであった。津田梅子の育ての親として知られるランマンについては，画家としての活動など未研究となっていることも多いことから，今後資料の渉猟を進め，日本との関わりを更に明らかにしていきたいと考えている。

【資料 1：岡倉天心『東洋の覚醒』紹介記事】

‘New Book on Japan’

Los Angeles Herald Sunday Supplement,　January 1, 1905, p.6.

A figure of unique interest is Mr. Okakura-Kakuzo, a native of Japan, ranked as

the highest authority living on oriental archaeology and art, now connected with the Boston Museum of Fine Arts. There will be special and peculiar interest, too, in the new book by this Japanese authority, "The Awakening of Japan," issued by the Century company last week. Mr. Okakura-Kakuzo was born in the year 1863. Having been, as he has said, "from early youth found of old things," after leaving college in 1880 he interested in himself in the formation of clubs and societies for archaeological research.

In 1886 this scholarly young enthusiast was sent to America and Europe as a commissioner to report on western art education. On returning he organized the Imperial Art School of Tokio, of which he was made director. He was also one of the chief organizers, and is still a member, of the archaeological commission, whose duty it is to study, classify and preserve the ancient architecture the archives of the monasteries and all specimens of ancient art.

Okakura, was naturally one of the promotors of the reactionary movement against the wholesale introduction of western art and manners. This movement was carried by the starting of periodicals and clubs devoted to the preservation of the old life of Japan – the work being carried on also in the field of literature and the drama.

In 1898 he resigned the directorship of the Imperial Art School at Tokio, having had some difference with the educational authorities in the matter of the course instruction to be pursued therein. Nearly one-half of the faculty resigned at the same time and started in a suburb of Tokio a private academy called Nippon Bijitsuin. Here are kept up ancient traditions of native art.

Simultaneously with the foundation of this school of instruction a number of prominent painters of the national school of art in various parts of the country organized the Society of Japanese Painters, of which the president is Prince Nijyo, the head of the Fujiwara family and uncle of the crown princess, Okakura being elected vice president.

"The Awakening of Japan," like the author's earlier book, "The Ideals of the East," is not a translation, but was written by its Japanese author originally in English. It answers, it is said, the question now uppermost in the finds of western observes: From what sources are drawn the intellectual and moral qualities which have enabled the present generation of statesmen, citizens, soldiers and sailors and an able emperor, to enter suddenly, as a first-class, liberal power, into the company of nations?

【資料 2 :『モーニング・ジャーナル・アンド・クーリエ』紙　山川捨松卒業演説要旨】

Vassar College Commencement

Morning Journal and courier (New Haven [Conn.]), June 22, 1882, p.4.

The following extract will be of great interest to many of our readers, as the young Japanese lady referred to, Miss Stematz Yamakawa of Tokio, Japan, was for several years a member of the household of the late Dr. Bacon and intimately acquired with a large number of our prominent families:

The nest address was the most interesting of the whole series, being by Miss Stemaz Yamakawa of Tokio, Japan, on "British Policy toward Japan". She was elegantly dressed in a silk costume from her native country, richly embroidered in that gorgeous style which some of our aesthetic people try to imitate, but don't, and her address was an eloquent plea for the independent nationality of Japan. The selfish policy of England in all her dealings with the peoples of the East was described and denounced in severe terms. Behind the ostensible wish for the spread of Christianity and civilization is a desire to subject everything to the interest of British trade, and if this cannot be accomplished otherwise, to reduce Japan to British control, and make it the youngest sister of India, Cyprus and the Transvaal. She explained the effect of the rule of extra territorial jurisdiction, as established by the treaties, under which a British subject in any of the porta opened to trade is entirely independent of Japanese law, and only under the jurisdiction of a British Secretary of Legation. The government wishes to throw the whole country open to the commerce of the world, but if it does so it opens all to British law, and becomes powerless to protect itself and its people. The effect of the present policy was described as ruinous to Japan, and the speaker said that if it were carried further, and the attempt were made to extend British power, there were countrymen of hers who would resist to the last drop to their blood, and would never cease to straggle for an independent national existence. Her address was frequently interrupted by demonstrations of approval, and when she closed the applause was loud and long continued.

【資料３：チャールズ・ランマン編・著書】

・*Essays for summer hours*, Boston: Hilliard, Gray & Co., 1842
・*Letters from a landscape painter*, Boston, J. Munroe, 1845.
・*A summer in the wilderness; embracing a canoe voyage up the Mississippi and around Lake Superior*, New York, D. Appleton & company: Philadelphia, G.S. Appleton, 1847.
・*A tour to the river Saguenay, in Lower Canada*, Philadelphia: Carey and Hart, 1848.
・*Adventures of an angler in Canada, Nova Scotia and the United States*, London: R. Bentley, 1848.
・*Letters from the Alleghany Mountains*, New York: Geo. Putnam, 1849.

・*Haw-ho-noo*, Philadelphia: Lippincott, Grambo and Co., 1850.
・*Personal memorials of Daniel Webster: including a sketch of his public life and the particulars of his death*, Philadelphia: Lippincott, Grambo, 1852, c1851.
・*The private life of Daniel Webster*, New York: Harper, 1852.
・Charles Lanman, Oscar Bessau, Campbell Hardy, John W. Moore, Henry Buckley Ashmead, *Adventures in the wilds of the United States and British American provinces*, Philadelphia: John W. Moore, 1856.
・*Bohn's hand-book of Washington*, Washington: C. Bohn, 1856.
・Charles Lanman & Charles Richard Weld, *Adventures in the wilds of North America*, London: Longman, Green, Longman, Roberts & Green, 1862.
・Charles Lanman ed., *Journal of Alfred Ely, a prisoner of war in Richmond　Attribution*, New York: D. Appleton and Company, 1862.
・*Dictionary of the United States Congress*, [Washington, D.C.] : G.P.O., 1864.
・*The life of William Woodbridge*, Washington: Blanchard & Mohun, 1867.
・*The red book of Michigan: a civil, military and biographical history*, Detroit: E.B. Smith & Co.; Washington: Philp & Solomons, 1871.
・*Life and resources in America. Prepared under the direction of Arinori Mori. For circulation in Japan*, Washington, D.C., 1871.
・*The Japanese in America*, New York : University Pub. Co., 1872; London, Longmans, Green, Reader, and Dyer, 1872.
・*Biographical annals of the civil government of the United States: during its first century: from original and official sources*, Washington: J. Anglim, 1876.
・*Octavius Perinchief: his life of trial and supreme faith*, Washington: J. Anglim, 1879.
・Recollections of curious characters and pleasant places, Edinburgh: D. Douglas, 1881.
・*Leading men of Japan: with an historical summary of the empire*, Boston: D. Lothrop and company, 1883.
・*Farthest north; or, The life and explorations of Lieutenant James Booth Lockwood, of the Greely Arctic expedition*, New York: D. Appleton, 1885.
・*Haphazard personalities; chiefly of noted Americans*, Boston, Lee and Shepard; New York, C.T. Dillingham, 1886.

[1] 松沢弘陽校注『福沢諭吉集』新日本古典文学大系　明治篇 10，岩波書店，2011 年，114 - 117 頁。
[2] 幕末・明治初期の英語学習については,主に次の文献を参考とした。茂住實男「横浜英学所（上)」『大倉山論集』29 号，大倉精神文化研究所，1991 年，235 - 268 頁；茂住實男「横浜英学所（中)」『大倉山論集』30 号，大倉精神文化研究所，1991 年，59 - 90 頁；茂住實男「横浜英学所（下)」『大倉山論集』32 号，大倉精神文化研究所，1992 年,125 - 165 頁；日本英学史学会編『英語事始』エンサイクロペディア

ブリタニカ，1976 年；太田雄三『英語と日本人』講談社学術文庫,1995 年。
[3] *Los Angeles Herald Sunday Supplement*, January 1, 1905, p.6. 岡倉天心の経歴も紹介され,「若い頃から古いものに興味を持っていた」と語ったことや,東京美術学校長辞任の経緯,岡倉の辞任に伴って二分の一の教員が辞職したことなども示されている。
[4] 『菱田春草』東京国立近代美術館，2014 年，234 - 235 頁。
[5] アーネスト・サトウ『一外交官の見た明治維新』（上），坂田精一訳，岩波文庫，1960 年，21 頁。
[6] 茂住實男「横浜英学所（上）」，257 - 258 頁。
[7] 同上，252 - 253 頁。
[8] バラについては,ジェームズ・ハミルトン・バラ著,井上光訳『宣教師バラの初期伝道　しののめ夜明け日本における神の国のはじまり』キリスト教新聞社，2010 年参照。
[9] 幕末・明治期における宣教師と英語教育については，小林功芳『英学と宣教の諸相』有隣堂，2000 年参照。
[10] 茂住實男「横浜英学所（中）」72 - 73 頁。高橋道男編訳『S.R.ブラウン書簡集』日本基督教団出版部，1965 年，139 - 140 頁。
[11] 岡倉天心著，隈元謙次郎［ほか］編集『岡倉天心全集』別巻，平凡社，1981 年，年譜参照。古田亮監修『岡倉天心: 近代美術の師』別冊太陽，平凡社，2013 年。井田好治「岡倉天心と英学修業」『英学史研究』9，1976 年，47 - 60 頁。
[12] 小野文子「メリーランド大学所蔵　L.W.　メーソン・コレクション」『信州大学教育学部研究論集』vol.10，　2017 年，195 - 206 頁。
[13] オールコック著，山口光朔訳『大君の使節』（中），岩波書店，1962 年，35 頁。
[14] 日本英学史学会編，前掲書，77，80，114 - 116 頁。
[15] 太田雄三，前掲書，83 頁。グリフィス，山下英一訳『明治日本体験記』(『皇国』第 2 部）平凡社，1984 年，59 頁。
[16] 三宅雪嶺『自伝 / 自分を語る』日本図書センター，1997 年，37 頁。
[17] 同上，163 - 164 頁。
[18] 『東京大学法理文学部一覧略　明治 11 年』東京大学法理文学部，1878 年（国立国会図書館デジタル・アーカイブ参照)。
[19] 幕末，明治期にかけての日本人海外留学生については，石附実『近代日本の海外留学史』中公文庫，1972 年参照。
[20] 森有礼については，大久保利謙編『森有礼全集』1 - 3 巻，宣文堂書店，1972 年，犬養孝明『森有礼』吉川弘文館，1986 年を参照。
[21] 同上，2 巻，53 - 54 頁。
[22] *Life and Resources of America*, prepared under the direction of Arinori Mori. For circulation in Japan, Washington, D.C., 1871. 本校執筆にあたっては, Edited, annotated, and introduced by John Van Sant, forwarded by Akira Iriye, *Mori Arinori's Life and Resources in America*, Oxford: Lexington Books, 2004 を参照した。また，本書やランマンによる日本関連の出版物についての詳しい解説は，前掲『森有礼全集』3 巻，3 - 33 頁のアイバン・ホール「解説」を参照。
[23] 全体の構成は次の通りである。前掲のホールによる解説では 12 章構成とされており，6 章の Life in the Factories についての記載がない。1 章：Official and Political Life, 2 章：Life among the Farmers and Planters, 3 章：Commercial Life and Developments, 4 章：Life among the Mechanics, 5 章：Religious Life and Institutions, 6 章：Life in the Factories, 7 章: Educational Life and Institutions, 8 章：Literary, Artistic, and Scientific Life, 9 章：Life among the Miners, 10 章：Life in the Army and Navy, 11 章：Life in the Leading Cities, 12 章：Frontier Life and Developments, 13 章：Judicial Life
[24] Charles Lanman, *Leading men of Japan: with an historical summary of the empire*, Boston: D. Lothrop and company, 1883, p.136.
[25] *The Japanese in America*, by Charles Lanman, American Secretary Japanese Legation in Washington, London: Longmans, Green, Reader and Dyer, 1872.
[26] 塩崎智「幕末維新期に米国で学んだ日本人の英語力」『青淵』渋沢青淵記念財団竜門社，792 号，2015 年，32 - 34 頁。
[27] Charles Lanman, op.cit., pp.58-59. 本稿執筆にあたっては，*Applewood's American Immigration Series, The Japanese America, Charles Lanman*, Carlisle MA: Applewood Books のオンディマンド復刻版を参照した。オリジナルについては，アメリカの複数の大学図書館に所蔵されており，デジタル・アーカイブで公開されている。
[28] 塩崎智「日本人留学生の発信」『青淵』渋沢青淵記念財団竜門者，767 号，2013 年，22 - 25 頁。塩崎智「幕末維新期，米国日本人留学生による英文発信例の考察－中学校（モンソン・アカデミー）卒業式で朗読された英文スピーチを資料として」『拓殖大学語学研究』127 号，2012 年，1 - 43 頁。

[29] 'Vassar College Commencement', *Morning Journal and Courier*, New Haven [Conn.], June 22, 1882, p.4. 久野明子『鹿鳴館の貴婦人大山捨松　日本初の女子留学生』中公文庫，1993 年，134 - 138 頁。
[30] Joan M. Marter ed., *The Grove Encyclopedic of American Art*, vol.1, Oxford University Press, 2011, p.102.
[31] 村垣淡路守「米国に使節として - 航海日記」，髙橋邦太郎編『近代日本の目ざめ』現代日本記録全集，第 1，筑摩書房，1969。
[32] *Catalogue of W. W. Corcoran's Gallery*, prepared by Chs. Lanman, Washington, D. C., 1857. Sara Cash ed., *Corcoran Gallery of Art American Paintings to 1945*, Corcoran Gallery of Art, Washington, D.C.in association with Hudson Hills Press, Manchester and New York, 2012.
[33] 吉川利一『津田梅子』婦女新聞社，1930 年，68 - 71 頁。山崎孝子『津田梅子』吉川弘文館，1988 年，75 - 80 頁。
[34] From Charles Lanman to James J. Hill, November 9, 1892. Minnesota Historical Society.
[35] *Charles Lanman Landscape and Nature Studies curated by Harry Frederick Orchard*, Morris Museum of Arts and Sciences, New Jersey; The Museum at Stony Brook, New York; The Monroe County Historical Museum, Michigan; The Woodmere Art Gallery, Philadelphia, 1983-1985.
[36] 吉川利一，前掲書，65 - 66 頁。山崎孝子，前掲書，56 - 67 頁。
[37] 高瀬暢彦編『金子堅太郎自叙伝』第 1 集，日本精神文化研究所，2003 年，82 - 83 頁。

文献

オールコック著，山口光朔訳『大君の使節』（中），岩波書店，1962 年
ジェームズ・ハミルトン・バラ著, 井上光訳『宣教師バラの初期伝道　しののめ夜明け日本における神の国のはじまり』キリスト教新聞社，2010 年
Sara Cash ed., *Corcoran Gallery of Art American Paintings to 1945*, Corcoran Gallery of Art, Washington, D.C.in association with Hudson Hills Press, Manchester and New York, 2012.
古田亮監修『岡倉天心：近代美術の師』別冊太陽，平凡社，2013 年
グリフィス，山下英一訳『明治日本体験記』（『皇国』第 2 部）平凡社，1984 年
井田好治「岡倉天心と英学修業」『英学史研究』9，1976 年，47 - 60 頁
犬養孝明『森有礼』吉川弘文館，1986 年
石附実『近代日本の海外留学史』中公文庫，1992 年（初版：ミネルヴァ書房，1972）
小林功芳『英学と宣教の諸相』有隣堂，2000 年
久野明子『鹿鳴館の貴婦人大山捨松　日本初の女子留学生』中公文庫，1993 年
Life and Resources of America, prepared under the direction of Arinori Mori. For circulation in Japan, Washington, D.C., 1871. (Edited, annotated, and introduced by John Van Sant, forwarded by Akira Iriye, *Mori Arinori's Life and Resources in America*, Oxford: Lexington Books, 2004.)
Charles Lanman, *The Japanese in America, by Charles Lanman, American Secretary Japanese Legation in Washington*, London: Longmans, Green, Reader and Dyer, 1872.
Charles Lanman, *Leading men of Japan: with an historical summary of the empire*, Boston: D. Lothrop and company, 1883.
From Charles Lanman to James J. Hill, November 9, 1892.
Los Angeles Herald Sunday Supplement, January 1, 1905.
Joan M. Marter ed., *The Grove Encyclopedic of American Art*, vol.1, Oxford University Press, 2011.
松沢弘陽校注『福沢諭吉集』新日本古典文学大系　明治篇 10，岩波書店，2011 年
三宅雪嶺『自伝 / 自分を語る』日本図書センター，1997 年
'Vassar College Commencement', *Morning Journal and Courier*, New Haven [Conn.], June 22, 1882.

茂住實男「横浜英学所（上)」『大倉山論集』29 号，大倉精神文化研究所，1991 年，235 - 268 頁
茂住實男「横浜英学所（中)」『大倉山論集』30 号，大倉精神文化研究所，1991 年，59 - 90 頁
茂住實男「横浜英学所（下)」『大倉山論集』32 号，大倉精神文化研究所，1992 年,125 - 165 頁
村垣淡路守「米国に使節として - 航海日記」，髙橋邦太郎編『近代日本の目ざめ』現代日本記録全集，第 1，筑摩書房，1969
日本英学史学会編『英語事始』エンサイクロペディアブリタニカ，1976 年
岡倉天心著，隈元謙次郎［ほか］編集『岡倉天心全集』別巻，平凡社，1981 年
小野文子「メリーランド大学所蔵　L.W.　メーソン・コレクション」『信州大学教育学部研究論集』vol.10，　2017 年，195 - 206 頁
Charles Lanman Landscape and Nature Studies curated by Harry Frederick Orchard, Morris Museum of Arts and Sciences, New Jersey; The Museum at Stony Brook, New York; The Monroe County Historical Museum, Michigan; The Woodmere Art Gallery, Philadelphia, 1983-1985.
大久保利謙編『森有礼全集』1 - 3 巻，宣文堂書店，1972 年
太田雄三『英語と日本人』講談社学術文庫,1995 年
アーネスト・サトウ『一外交官の見た明治維新』（上)，坂田精一訳，岩波文庫，1960 年
塩崎智「幕末維新期に米国で学んだ日本人の英語力」『青淵』渋沢青淵記念財団竜門社，792 号，2015 年
塩崎智「日本人留学生の発信」『青淵』渋沢青淵記念財団竜門者，767 号，2013 年，22 - 25 頁
塩崎智「幕末維新期，米国日本人留学生による英文発信例の考察－中学校（モンソン・アカデミー）卒業式で朗読された英文スピーチを資料として」『拓殖大学語学研究』127 号，2012 年，1 - 43 頁。
高谷道男編訳『S.R.ブラウン書簡集 幕末明治初期宣教記録』1965 年,日本基督教団出版局
『東京大学法理文学部一覧略　明治 11 年』東京大学文法理学部，1878 年
『菱田春草』東京国立近代美術館，2014 年
高瀬暢彦編『金子堅太郎自叙伝』第 1 集，日本精神文化研究所，2003 年
山崎孝子『津田梅子』吉川弘文館，1988 年
吉川利一『津田梅子』婦女新聞社，1930 年

附記

本稿は，科学研究費助成による研究課題「日米文化・芸術交流に果たした日本人留学生の役割に関する調査研究」（課題番号　17K02312）の調査報告である。

（2017年12月20日　受付）
（2018年 3月19日　受理）